

近畿特別支援教育連絡協議会（近特連）滋賀県大会 参加レポート

全日本特別支援教育研究連盟（全特連）埼玉大会 参加レポート

近特連大会参加レポート 大阪市立三国中学校

今年の講師は関西学院大学教育部の先生です。「インクルーシブ教育システムの現状と可能性」について講演をしてくださいました。

お話をいただいた内容について、興味深く思った点は、全体として目指す方向はインクルーシブと言いつつも、保護者や当人のニーズにズレがあることでした。もちろん、集団の中で当人が共に学べる環境や力があるのならば、それは良いことだと思います。しかし、集団の中で当人が困難を感じているのであれば、別室、またはそれに準じる方法で当人の長所を伸ばせられれば、当人にとっても保護者にとっても、気持ちの面で満足感や充足感があるのではないかと思いました。

分科会では第8分科会「交流及び共同学習」に参加させていただきました。大阪市立港中学校の先生の報告が印象に残っています。先生の提案「生徒の可能性を信じて—特別支援学級（SSC）在籍生徒の進路を勝ち取るために—」A君が自分に自信を持ち、進路を選択するまでの報告です。1年生のときには心を閉ざしていたA君が、関係の先生方のA君を受容する接し方により、2.3年で変わっていく様子を報告してくださいました。やはり、子どもたちは褒められ、認められて自信を持っていくのだなと改めて感じることができました。自分自身、現在関わりの難しいと感じる生徒がいます。これからの方針に取り入れてみようと思いました。

第56回近畿特別支援教育連絡協議会 滋賀県大会に参加して

大阪市立三国中学校

1. 記念講演

演題 「インクルーシブ教育の現状と課題」

講師 関西学院大学 教育学部 教授

特別支援教育の充実を目指して多様な学びの場の確保と教育の連続性が必要であるとの提言があった。連続性のある多様な学びの場として居住地域の小中学校の通常の学級での支援、それにはT・Tや小集団での指導を含む支援やさらに進めて通常の学級で支援員を活用した個別的な支援も含め、多様な支援が連続的につながることが必要である。大阪が目指してきた「地域で共に育ち、ともに生きる教育」はこの意図に沿ったも

のであり、改めて大阪の先進性を感じさせられた。また、「個別の指導計画」は「個別指導の計画」ではなく、ひとりひとりのニーズを踏まえてそれぞれの状況に合った適切な指導を計画することであるなど、統合教育と個別のニーズに対応する教育との調和を探ってきた大阪の取組の確かさを改めて認識する内容のお話であった。

2. 分科会

午後からは分科会が行われたが、私は第8分科会「交流及び共同学習」に参加した。第8分科会には大阪市から港中学校の先生から、「生徒の可能性を信じて～特別支援学級（SSC）在籍生徒の進路を勝ち取るまで～」と題してご提案された。特別支援学級に在籍し、児童養護施設から同校へ通うA君が3年間を通じて周りの教職員や生徒との関係を通じて成長し、自分で高等専修学校への進路を選択して卒業していった経緯を様々なエピソードを添えての報告があった。

私は交流教育の目指すことは学級集団での指導や小集団での指導が対象となっている生徒個人だけに向かうのではなく、集団の中で対象となる生徒がどう変わっていくか、また、集団自身がどう支え合える集団に変わっていくのかが大きな課題であると考える。

この報告では大きな指導の転機は2回あったと考える。まず、ある事件の対応をきっかけに担当の先生自身が一人で抱え込むことを止め、通常の学級担任や学年教師集団の協力を得て、教職員が一体となってA君に向き合おうとしたこと。具体的には教師が交代で施設を訪ね、A君とじっくり話し合うことでお互いの思いが通い合い、A君が素直な気持ちを表せるようになったこと。1回目の転機を通じてA君は学校全体から自分が大切にされていることに気づいたのではなかろうか。また、複数の違った方向からの先生方の声掛けが自分を見つめ直す大きなきっかけになったのかもしれない。

2回目は修学旅行の取組で、A君が活躍し、その様子に周りの生徒がA君の素直な気持ちや真面目な性格を理解していったことである。A君は実はバンド演奏がしたくてお小遣いをためて楽器を買おうとしていた。そのことを教師たちが知り、活躍の場を提供したいと考えた。その思いが修学旅行のリクレーションでの演奏という形で一つになった。

成功体験を積み重ね、A君の自己有用感を育てた教師集団、それを理解して期待に応えようと努力したA君、そしてA君を信頼して受け入れた周りの生徒たち、そのなかでA君はもちろん、他の生徒も教師も成長していった。まさに、そこには「学びの共同体」の場として学校があった。そして様々な気づきがあった。進路指導は生徒の将来を見通して行われるものである。そこには教師の生徒に対する信頼、生徒の教師に対する信頼の両方が必要である。そして信頼の積み重ねがお互いの成長に不可欠であるという実践報告であると感じた。

近特連滋賀県大会に参加して 大阪市立花乃井中学校

第 56 回近畿特別支援教育連絡協議会滋賀県大会にて、今年度大阪市は「交流及び共同学習」の発表を大阪市立港中学校の先生よりしていただきました。特別支援学級生徒の進路を勝ち取るまでの通常の学級の生徒との交流や、学習の様子を話していただきました。

また、私は司会という立場で参加させていただき、主な協議の柱として①豊かな心を育む交流及び共同学習の在り方、②様々な多様性を受け入れる心情や態度を育む障がい者理解教育の工夫の 2 点を挙げて研究協議を進めました。大阪市のインクルーシブ教育への質問が多く出て、大阪市の先生方からも意見を出していただき活発な研究協議になりました。司会という立場だったので、発表前後や休憩時間にも他府県の発表者や司会の方々と意見交換を行うことができ、貴重な一日となりました。

近特連・滋賀県大会に参加して 大阪市立董中学校

令和元年 8 月 9 日（金）に近特連・滋賀県大会に参加させて頂き、ありがとうございました。

午前中は、関西学院大学教育学部先生の「インクルーシブ教育システムの現状と可能性」についての講演を拝聴させていただきました。

その講演会の中で、一番大切なことは、「多様な学びの場の確保と連続性」であると先生は話されていました。生徒たちの希望や成長に伴い、普通学級と特別支援学級を必要に応じて変われる可能性を残すためにも、学習などいろいろな面での学びの連続性を確保することが大切であること。連続性を確保することが、将来、自立への助けになり、また、自立したときの社会の障壁を少しでも減らすことにつながり、生徒たちにとって、いかに大切であるかを講義の中で、いくつかの例を挙げて分かりやすく話してくださいました。

午後からは、『第 3 分科会 知的障害特別支援学級（中学校）での教科化を見据えた道徳授業』と題した京都市立西ノ京中学校の取り組みについて学ばせて頂きました。生徒たちに合わせた指導の中で、特別支援学級の生徒たちに学んでほしい道徳について抽出授業で実践されたことを発表頂きました。道徳の授業で、生徒たちのペースで、生徒たちに主体的に学び、生徒たちの自立した生活と他者とのより良い人間関係の形成を目標として、社会の中で生きていく上での力をつけていってほしいと思います。対象の生徒たちの状態は様々なので、今回の発表をすぐにどこの特別支援学級でも同じように実践できるわけではないかもしれません、今回の実績報告を参考して、取り組んでいこうと思います。

午前の講演、午後の発表と、学ばせていただくことが多く、早速、できることから

少しづつでも今後の生徒たちへの指導に生かしていきたいと思いました。特に、今年度から教科として評価の対象となった道徳の指導を学べたことはとても意義深いものがありました。子どもたち一人ひとりの能力を最大限に引き出し、伸ばすためにも、専門性の高い先生方の講義を拝聴させて頂くことや他府県の様々な取り組みや実践をご紹介頂くことは、多様な生徒たちを指導する私たち特別支援学級の教員にとって、とても貴重な学びの機会です。本当にありがとうございました。

全日本特別支援教育研究連盟（全特連）埼玉大会 参加レポート

大阪市立佃中学校

令和元年 10 月 17 日木曜日、18 日金曜日の 2 日間にわたり第 58 回全日本特別支援教育研究連盟全国大会埼玉大会に参加した。

本大会は全日本特別支援教育研究連盟発足 70 周年を記念する大会であり 10 月 17 日は功労賞の表彰式があり大阪市からは成南中学校の校長先生が表彰された。研究報告では千葉県立銚子特別支援学校と埼玉県立特別支援学校羽生ふじ高等学園の 2 校より報告があった。ひとつ目は千葉県立銚子特別支援学校の「職業」の授業で生徒が自分たちで会社を作り役割などを振り分けて仕事に主体的に取り組む様子が報告された。ふたつ目の埼玉県立特別支援学校羽生ふじ高等学園の発表では近隣の高校生とともに取り組む合唱ミュージカルが報告された。合唱ミュージカルは羽生ふじ高等学園の全校生徒のほか誠和福祉高校と羽生第一高校の吹奏楽部やコーラス部の生徒とともに「共に学び、共に生きる」ことを目指しステージを創り上げていた。

基調報告、行政説明、シンポジウムとあり内容も充実しており予定時間を上回った。基調報告では学習指導要領の変遷と最近のインクルーシブ教育システム構築に関する動きや今後の方向性について報告があった。行政説明、シンポジウムについても学習指導要領で明示された合理的配慮に基づくインクルーシブ教育システムの今後の方向性を示唆するものであった。また、シンポジウムでは埼玉県が取り組んでいるインクルーシブ教育の推進と支援籍（居住地校との交流及び共同学習）についての報告があり学びの連続性の観点から非常に興味深いものであった。

2 日目の午前中は、さいたま市立日進中学校と埼玉大学教育学部附属特別支援学校を見学し、午後は大宮ソニックシティビルでの分科会に参加した。日進中学校の特別支援学級は「10 組」と呼ばれ 2 部屋設置されており柔軟に時間割を編成していた。通常学級では黒板にデジタルタイマーが設置されており時間を細かく区切った構造化された授業が展開されているのかを感じた。しかし、教室内の壁面に掲示物が非常に多く、配慮をする生徒への対応について少し疑問が残った。附属特別支援学校は小・中・高等部を合わせて 60 名の小規模な学校であったが、自立を目標に様々な教育プログラムが展開されていた。分科会は教科別の指導（中学校段階）に参加し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた

授業改善について協議を深めた。

今回参加した内容をふまえて自己研鑽に励み、今後もインクルーシブ教育システム推進に生かしていく所存である。

第58回全日本特別支援教育研究連盟全国大会埼玉大会に参加して

大阪市立八阪中学校

令和元年10月17日(木)・18日(金)に埼玉県大宮市にて全特連埼玉大会が開催されました。

17日(木)の研究報告では、埼玉県立特別支援学校羽生ふじ高等学園の生徒たちによる、「共に学び、共に生きる」～合唱ミュージカルライオングの取組～を、大宮ソニックスシティホール大ホールで実際に鑑賞しました。そこには、高等学校の合唱部、吹奏楽部の生徒たちと特別支援学校の生徒たちが真剣に合唱し、演技をし、また特別支援学校の生徒が一人でマイクの前に立って堂々とセリフを話しながら、お互いが相手のことを思いやり前向きに一つの舞台を創り上げる素晴らしさがありました。緊張した面持ちではありましたが、こんなに大きなホールの舞台で発表できる喜びが客席にまで届き、まさにこれが「共生」なのだと実感できる取り組みでした。

18日(金)は、さいたま市立日新中学校と埼玉大学教育学部付属特別支援学校に学校見学に行きました。

さいたま市立日新中学校では、支援学級の生徒たちが一生懸命何かを作成中…とても集中して作業に取り組めていましたが、私たち見学者が教室の中に入ると、しっかりと「ここにちは！」とあいさつをしてくれました。総学級数25プラス支援学級2という大規模校にも関わらず、どの学年の授業も落ち着いていて、とても温かい雰囲気が漂う教室ばかりでした。

こんな素敵なお同級生たちに恵まれているから、支援学級の生徒たちも穏やかにのびのびと活動できるのかと納得させられました。

埼玉大学教育学部付属特別支援学校では、小学部から高等部までの見学をさせていただきましたが、甚大な被害をもたらした台風19号の影響で午前授業になっており、最後に回った高等部はHR寸前の着替えタイムでした。あまり見学時間の無い中で感じたことは、全面芝のグラウンドがとても画期的で美しく、地面から足の裏に伝わる感触がとても優しかったり、日常生活訓練棟「しいのきハウス」という宿泊学習や調理学習を始め生活面の自立を目指した細やかな指導ができる環境が整っていたりと、児童・生徒に寄り添った支援が充実し、一人ひとりが一生懸命学んでいる元気いっぱいの学校だなということでした。

先生方も明るく、校長先生自ら校内を回り声をかけ、いつも笑顔で接しておられました。

子どもたちからも、先生方や学校が大好きという想いが伝わってきて、在籍数が少ない付属支援学校だからこそできる細やかな支援が見て感じられました。

他府県の学校の取り組み発表を聞いたり、実際に学校見学をする機会は少ない中、このような機会を与えて下さり貴重な学びができたことを大変うれしく思います。この学びを糧に、これから特別支援教育に役立てていきたいと思います。